

北のとびら

vol. 108

平成28年3月



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

特集

ダンス・創作への挑戦

コンテンポラリーダンス
振付家養成への
アプローチ

この人に注目

漆 崇博

アートの子カラを考える

帯広・劇団演研
40年の活動

街歩きアート

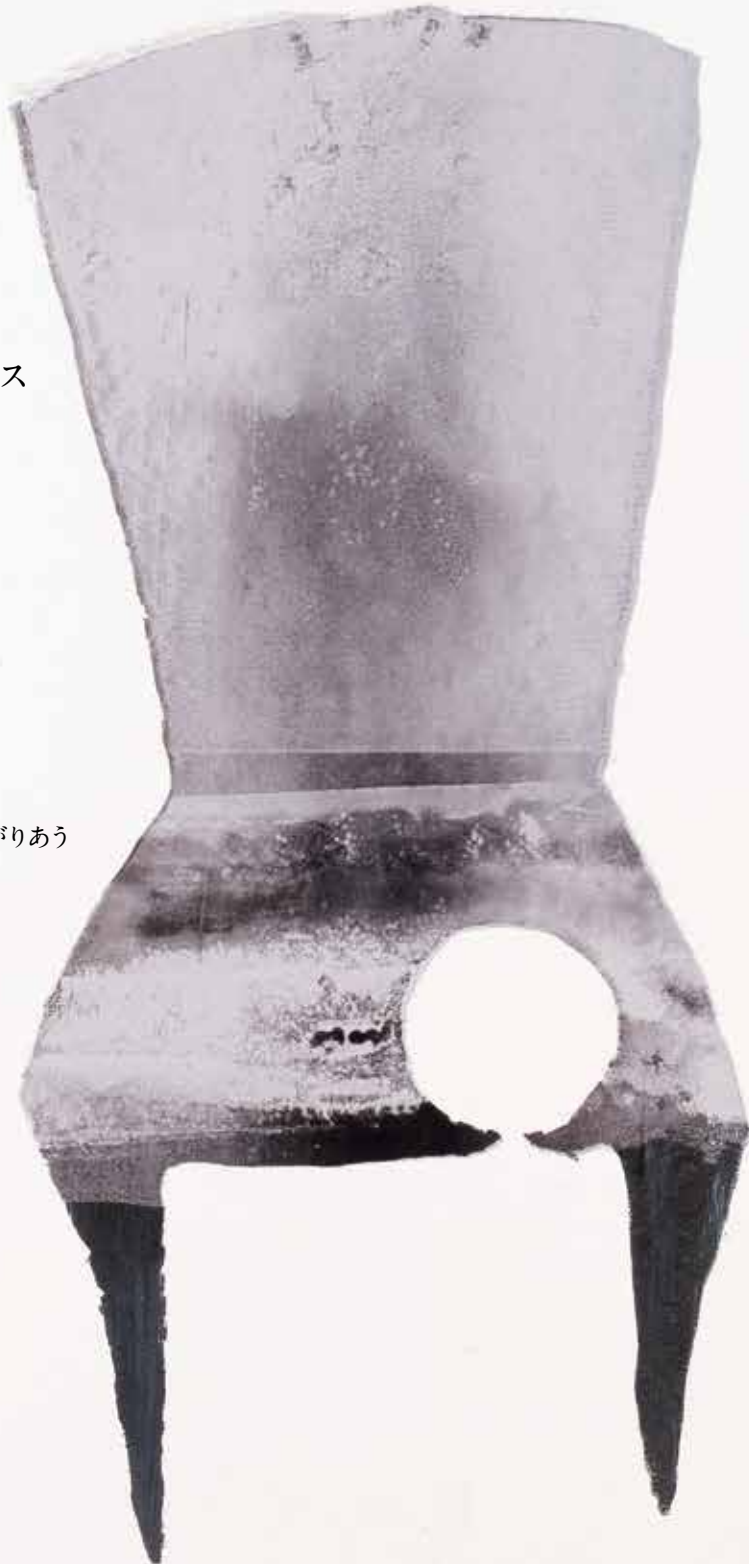
古くからの人の営みで繋がりあう
伝統と記憶の風景
[白老町]

フォト・エッセイ

前田 司郎

表紙作家の紹介

大泉 力也



コンテンポラリーダンス 振付家養成へのアプローチ

北海道から世界に飛び出して活躍するダンサーが増えた近年、「踊れるダンサー」を見守る人たちの間で「今こそ北海道発のコンテンポラリーダンスの創作を!」との熱い声が上がりました。「踊る」から「創る」へ、北海道で行われている振付家を育むためのアプローチをご紹介します。

とともに、各開催地で公募・選出した作品を上演する企画で、コンカリーニョは継続的に札幌公演を開催してきました。
2011年(11回目)の実施から「踊りに行くぜ!!」は新作づくりに取り組むプロジェクトに。全国公募で選ばれた振付家が北海道に滞在し、地元ダンサーとともに作品を創作・上演するプログラムを行うなど、北海道発のダンス作品の創出をサポートしていきます。
今年、「生活支援型文化施設」としてのコンカリーニョは開設10周年を迎え、記念企画のひとつとして、9月には道内ダンサーらが多数参加するプログラムが予定されています。「北海道で新進のダンサー・振付家がどんどん出てくるよう、積極的にダンス作品を発表する機会を設けていきたい」と、理事長の斎藤ちずさん。北海道から独創的なダンス文化を発信するために、将来的にはダンスカンパニーを立ち上げる構想を温めています。

北海道ダンスプロジェクト

HDP公演
「新たな挑戦〜New Challenge〜」シリーズより



浜田純平
(2014年 審査員特別賞受賞)



加藤正汰郎
(2012年 審査員特別賞受賞)



河野千品
(2013年 審査員特別賞受賞)

コンカリーニョ

JCDNダンス作品クリエイション&全国巡回プロジェクト
「踊りに行くぜ!!」II(セカンド)vol.6札幌公演より



東野祥子「現代版-7つの大罪-第一章」
(出演/ 蛭谷凜之介、神島百合香、佐々木理恵、志賀千穂、柴田詠子、浜田純平、三木美智代)
撮影:yixtape



本田大河「人性」 撮影:yixtape



コンカリーニョ、
ダンスカンパニーの夢へ

北海道で早くからコンテンポラリーダンスに特化した公演を企画してきたのが、札幌市西区にある生活支援型文化施設「コンカリーニョ」を運営する、NPO法人コンカリーニョです。1999年、岩下徹さん、平戸健司さん、竹之内淳志さんの作品をフェスティバル形式で上演したことをきっかけに、以降5年間、企画公演「ダンスウィーク」を継続しました。伊藤キムさんなど道外のダンサー・振付家を招いたほか、道内のダンススタジオで振付を手がけていたダンサーらにも作品発表を依頼。コンテンポラリーダンスの創作へのアプローチを行っています。

2001年には、NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)が主催するコンテンポラリーダンスの普及を目的とした全国を巡回する公演プロジェクト「踊りに行くぜ!!」がスタート。関東・関西発の作品を地方で発表する

北海道ダンスプロジェクト、
創作経験がダンサーの成長に

「かつては模倣はタブーで、誰もが自分なりのダンスを踊っていました。今はコンテンポラリーでもショーダンスでも、インターネットの動画で簡単にみることができて、その振りを真似て満足するダンサーが多い。入門としてはそれで良いと思うのですが…」

振付家がなかなか育たない背景について、北海道ダンスプロジェクト(HDP)の代表でダンススタジオオマインド(舞人)の主宰者、宏瀬賢二さんはそう指摘します。

HDPは道内のダンススタジオ主宰者やインストラクターら約130名が参加する組織で、ジャズダンス、ヒップホップ、バレエなど、ジャンルを問わずダンス文化の発展・向上を目的とした活動を行っています。指導者やダンサーの育成と成果発表を兼ねた公演も実施しており、「自分なりのダンスを踊ること」へのアプローチとして、出演者が創作した作品を披露する公演を企画してきま

した。

2011年からは、若手振付家・ダンサーの育成とコンテンポラリーダンスの普及を目指して、HDP公演「新たな挑戦（New Challenge）」シリーズを開始。作品を発表後、評論家や著名なダンサー・振付家などのゲストアドバイザーから公開批評を受ける、全国的にも珍しい取り組みです。同シリーズで受賞した振付家ほかのコンクールで活躍する例も増えており、2014年受賞作品をブラッシュアップして「2016 YOKOHAMA DANCE COLLECTION」に参加した浜田純平さんが、『若手振付家のための在日フランス大使館賞』（準優勝）を獲得。また、海外から招聘されるダンサーも現れています。「振付は機会を与えてあげなくては生まれてこない。経験の中からよい振付家が育つ」と宏瀬さん。一方で、ダンサーの成長に合わせたアドバイスの重要性も感じていると、この「これからの確なアドバイスができる指導者の養成についても取り組んでいきたい」と語ります。

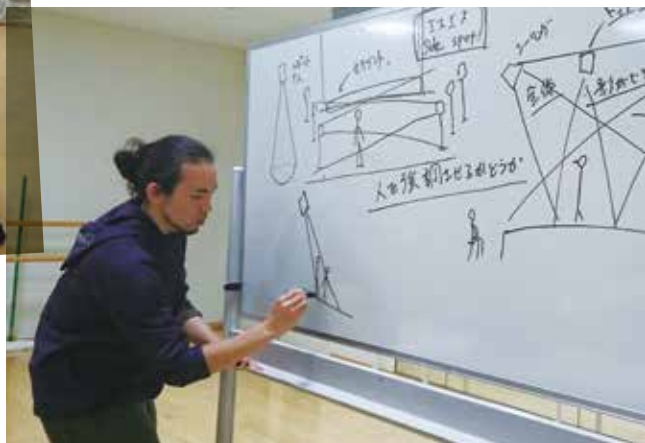
コンテンポラリーダンスですが、「長く上演できる名作をひとつプロデュースできれば突破口になる」と考えているそう。特に日本では自由な身体表現でありながら似たような作品が増えており、「独自性の追求にはまだ余白がある」と語ります。

目標は、道内地方都市を巡る公演の実施。そこに向けて「物語性、抽象性、音楽などさまざまな要素が絡み合つて観客の心を捉える良質な作品づくり」へのアプローチを続けています。今年には平原慎太郎さんに作品制作を依頼しているほか、振付家を公募して作品制作をサポート・上演する企画も予定しています。

「今足りないモノはなにかを常に考えて企画してきた」と語る森嶋さん。めざましく成長している北海道のダンサーたちの、次なるステップへの準備を進めています。

CONTE-SAPPORO

「振付家養成講座」とショーイングより



撮影:yixtape

●特集 ダンス・創作への挑戦

CONTE-SAPPORO
社会と繋がる作品創造を

国内外で活躍するダンサー・振付家との緩やかで柔軟な繋がりを築き、コンテンポラリーダンスの普及に関わる活動を行っている「CONTE-SAPPORO」。3年前の立ち上げ以降、劇場での公演から会議室でのワークショップまで、合計すると既に150ものプロジェクトを実施してきました。

2014年には、振付家・ダンサーの平原慎太郎さんと三東瑠璃さんを講師に招き、座学を中心にした振付家養成講座を行っています。

「ワークショップだけでは身体を動かして終わってしまう。振付家とは何か、根本のところをしっかりと考える取り組みがなかった」と、代表の森嶋拓さん。振付家には行動力、社会性、コミュニケーション能力とさまざまなものが求められるため、「育てることは難しい、時間をかけて積み重ねていくしかない」と言います。一般にはまだ馴染みが少な

北海道文化財団では、これまで井手茂太さん、近藤良平さん、柳本雅寛さんなど広く国内外で活躍する振付家・ダンサーを招き、道内ダンサーにコンテンポラリーダンスの作品創作を体験してもらった講座を実施してきました。これからも道内のダンスシーンを支えるとともに、ダンサーや振付家育成のため、独自の企画を展開していく予定です。

北海道文化財団

道内の創作・表現者の育成を目的とする
自主事業「アートゼミ」より



井手茂太ワークショップと
ショーイング(2010年)



柳本雅寛ワークショップと
ショーイング(2013年)

漆 崇博

Takahiro Urushi



AIS事業の様子。2015年9月は、アーティストの永田壮一郎さんが札幌市手稲区の小学校に2週間通い、子どもたちとともに作曲やライブを行いました。



表現活動の発表やワークショップ、フリーマーケット、講習会などが行われている「よほどオノベカ」。年齢を問わず楽しみ、学び、遊べる場と機会を提供しています。



アーティストや研究者が滞在しながら活動を行うことができる「さっぽろ天神山アートスタジオ」の運営を、札幌市から受託。アーティストのプロジェクトとして、アーティストと来館者が一緒に朝食をとるなどの交流プログラムを実施しています。

北海道では数少ない、アートマネジメントを専門に行う組織「AISプランニング」。その代表理事兼コーディネーターとして活躍しているのが、平成27年度第1回アート選奨を受賞した漆崇博さんです。AISは、アーティストが学校に長期間滞在して子どもたちと一緒に創作・交流する活動「アーティスト・イン・スクール」の略で、AISプランニングの中心的な事業でもあります。

漆さんは宮城教育大学大学院で美術教育を学ぶ一方、アートと街を繋ぐプロジェクトやワークショップなどを企画・実施。北海道に戻った2004年以降、AIS事業に関わるようになりました。同時に芸術文化事業のコーディネーター、コミュニティスペースの企画運営、2014年に誕生した札幌国際芸術祭のマネージメントなどにも関わってきました。

AIS事業の狙いは、社会の未来であり、大人に強い影響を与える媒体である子どもたちに、学校というコミュニティとは異なる価値観を持つ存在であるアーティストと、対等な立場で関わり合う機会をつくること。価値観の違うもの同士が関わりあい共存できる社会の実現を目指しているのです。「アートマネジメントは、芸術やアーティストを通して社会に働きかける運動。将来的には、芸術だけでなく生活文化まで含めて、互いに教え・教わって関わり合うプラットフォームとなる学校のようなものをつくりたい」。広く社会のありようを見つめる漆さんは、アートと社会を結び役割の担い手として注目を集めています。

漆 崇博 / Takahiro Urushi

一般社団法人AISプランニング代表理事
石狩市出身。2002年、仙台市でシャッター街のアートによる再生を目的とした「ロジアート展」を開催。コーディネーターとして香川県観音寺ドビカーン観音寺事業（2005年～）、北海道文化財団アート体感教室事業（2009年～）、札幌国際芸術祭などに関わる。トヨタ子どもとアーティストの出会い（2010年～）や北海道コミュニケーション教育ネット（2012年～）の事務局を運営。よほどオノベカ、さっぽろ天神山アートスタジオ（2014年～）、札幌市資料館（2015年～）などの施設運営も行う。

◎アート選奨

北海道文化財団設立20周年を記念し、理事長・磯田憲一からの寄附金で創設された「アート選奨K基金」による顕彰です。北海道文化財団が主催および共催・支援する、道内で行われた文化芸術活動の中で特筆すべき活動を行い、本道の文化芸術の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人または団体に贈られます。

r

「地方で長く続いているアマチュア劇団は数多いけれど、『やりたいことだけをやる』というわがままを貫いてクオリティを保ち続けている劇団は他にない」
日本を代表する劇作家・演出家である平田オリザさんをして「そう言わしめたのが、帯広市を拠点に40年以上の活動を続けている『劇団演研』です。1975年、『活発な日常活動を持続することにより、地域に根ざした創造活動〜』をスローガンに掲げ、以降、メンバーがそれぞれの仕事に就いている中で、週2回以上の練習、年2回以上の公演を実施してきました。

上演作品は全て既存脚本。「演出でオリジナルにできる。何より、やりたいこと伝えたいことが、既存の脚本の中にあつた」と、長く演研の代表・演出家を務めてきた片寄晴則さんは言います。その時々々に心が動いた脚本に挑み、これまで清水邦夫、別役実、野田秀樹、つかこうへいなど多彩な作家・作品を上演してきました。

一方で、北海道の地域劇団との交流も積極的に展開。北見、釧路の劇団とともに、2001年〜2012年までの間に、7回にわたって「道東小劇場演劇祭」を開催しました。アフタートークには帯広出身の劇作家・鐘下辰男さんをはじめ、道外のそうそうたる劇作家・演出家を招き、地方で活動する演劇人が日本の先端演劇の思考に触れる機会を創出しました。

また、ワークショップなどを通して十勝の高校演劇関係者らとも交流。複数の高校演劇部が集って短編を上演する「冬のテトラ小劇場祭」などにも協力しています。

道東や十勝での演劇交流について、「互いに作品を観て意見を言い合い、一緒に創ること成長してきた」と語る片寄さん。片寄さんは昨年、代表を降りましたが、演研は新代表・富永浩至さんを中心に新しい作品づくりを続けています。また、交流を続けてきた北見の劇団動物園にも、片寄さんが実践してきた演劇づくりの精神が受け継がれています。

演研はこれまで、一度挑戦した脚本はレパトリーとして何度も再演し、完成度を高めてきました。「東京などの都市では、いい演劇が生まれてもどんどん消費されていく。地方には、お客様と一緒に一つの作品を長く育てることができると豊かさがある」と片寄さん。演研40年の活動は、地方都市ならではの演劇創造の可能性を次代に伝えています。



- 1 「楽屋」作：清水邦夫（1982年・初演／大通茶館）
- 2 「かごの鳥」作：別所文（1987年／大通茶館）
- 3 「楽屋」（1992年・再演／演研芝居小屋）
- 4 「薔薇十字団・澁谷組」作：清水邦夫（1994年／琴似駅前劇場）
- 5 平田オリザ新作書き下ろし「隣にいても一人」（2000年／演研芝居小屋）
- 6 初の東京公演「隣にいても一人」（2003年／こまばアゴラ劇場）
- 7 「思い出せない夢のいくつか」作：平田オリザ（2009年／シアターZOO）
- 8 「走りながら眠れ」作：平田オリザ（2012年・再演／演研・茶館工房）
- 9 北海道舞台塾「北の元気舞台」・創立40周年記念公演「楽屋」（2016年／シアターZOO）

黒い鳥が棲む、アートの森

飛生アートコミュニティ

飛生は、アイヌ語で「トップウシイ(根曲がり竹の多いところ)」という意味を持つとされている場所。「もうひとつ、Tupiu(黒い鳥)」という意味もあるようですと、彫刻家・国松希根太さんが教えてくれました。父である彫刻家・国松明日香さんから芸術家グループが1986年に立ち上げた共同アトリエ「飛生アートコミュニティ」は、現在長男の希根太さんが代表となり、若手アーティストが集う場として引き継がれています。

木造の建物は飛生小学校のおもかげがそのまま残され、体育館をスタジオに、教室を展示室に使用。今展示されている希根太さんの木彫作品は、氷山や雪山をテーマにしていて、木でありながらどこかひんやりした印象があります。「最近では、地形や時間の流れをテーマに制作しています。特に地元の風景からインスピレーションを得ることが多いですが、限定された場所だけでなく、人によって



違った風景が見えるはず」と希根太さん。たとえば、木版に描かれた一筋の水平線を眺めていると、どこかで見たような記憶や幻想の風景が重なり合うから不思議です。もともと金属を題材にしていた希根太さんは、木という素材には、節や割れなどが思いがけない偶然性を生み、自分だけの世界が立ち現われてくる面白さがあると考えています。

建物内は、普段は非公開ですが、毎年9月に「飛生芸術祭」を開催し地域に開放しています。作品展示のほか音楽などのステージや、地域の人たちがアートを楽しみながら自然を体験できる「飛生の森づくりプロジェクト」を実施。土地の記憶や自然とアートが結びつきながら大きな作品へと変化していくのが、毎年楽しみになるはずですよ。



「GLACIER MOUNTAIN」など、雪山や氷山をテーマにした作品が並ぶ



元体育館のスタジオには、制作中の「HORIZON」シリーズが

●白老郡白老町字竹浦520
※イベント時以外は基本的に非公開。
展示等見学希望の場合は、メールにて要連絡
e-mail contact@tobiu.com
www.tobiu.com (飛生芸術祭の情報はHPに掲載)

Column

白老・登別地域でフィールドワークを実施 アヨロラボラトリー

アヨロとは、白老町と登別市の境目に位置する、海にせり出した半島状の土地のこと。このアヨロ周辺をベースに、アイヌ民族博物館職員の立石信一さんと国松希根太さんは、昨年共同でフィールドワーク(FW)を行っています。縄文やアイヌ期の遺跡が多くありますが、2人が注目しているのは土地の風景です。「遺跡周辺や古道などを実際に歩くと、見慣れたはずの風景が意味を持って見えてくる。歩くことで人の記憶が積み重なった土地として、地域を再解釈できると考えます」



立石信一さん(左)と国松希根太さん(右)

そして、フィールドワークを重ねる中で、アヨロというひとつの世界がこの土地にあったことを改めて感じたと語ります。成果は文章や講演会で発表し、希根太さんは活動のきっかけとなったアフルパル(あの世への入り口とされるアイヌ期の遺跡)をテーマにした作品も制作。人と土地の記憶の繋がりに気づき、過去から今の自分が生きる場所を照射する体験は、刺激に満ちています。今後はほかの地域での活動も計画しているそうですが、2人には風景がどんなふうに見えるのか、興味深いところです。



水源を探すFWでの、白老にある虎杖浜4遺跡(縄文)



アヨロ海岸のFWでは、写真家・冒険家の石川直樹さんをゲストに招いた



街歩きアート

古くからの人の営みで繋がりあう 伝統と記憶の風景 [白老町]

昔からのアイヌの集落があり、アイヌ文化が息づく白老町。古式舞踊や手工芸など、アイヌ自身が自らの文化を発信し伝承することを大切にしてきました。

2020年には、北海道初の国立博物館の整備が決定し、注目を集めています。

また、目の前に海と、湖や森が広がる自然の風景は、アーティストの創作の源にもなっています。

アイヌ文化を未来へ繋げる空間

アイヌ民族博物館

1965年、アイヌのコタン(集落)をポロト湖畔に移設し、文化や伝統を発信・伝承するための白老ポロトコタンを開設したのがはじまりです。1984年に博物館が建てられ、観光地としても広く知られるようになりました。ここは道具など形ある物の展示だけでなく、歌や踊りといったアイヌ古式舞踊(ユネスコ無形文化遺産)を生で見られるのが最大の特徴です。コタンに並んだチセ(家)では毎日公演が行われており、鮮やかな民族衣裳の女性たちが鶴を真似て舞い踊る「サロルンチカプリムセ」や、伝統楽器ムックリ(口琴)の演奏など、暮らしの中で息づいてきた音楽の世界を堪能できます。

博物館の展示室では、約800点の資料を「食べる」「装う」などのテーマごとに展示。地元白老のみならず、道内全域および国内外から集められた歴史的史料や複製品は、地域によって多様なアイヌ文化があることを教えてくれます。

広くアイヌ文化への入り口となっているアイヌ民族博物館は、2020年に国立博物館として整備されることが決定しました。「民族共生の象徴となる空間」というコンセプトのもと、アイヌ民族をはじめ先住民族の文化を世界に発信する、ナショナルセンターの役割も担います。

2014年には「ルイカ・プロジェクト」がスタート。アイヌ文化と自由に繋がる場所へ「ルイカ(アイヌ語で橋)」を架け、酒造会社との伝統的な酒の復刻や、地元地域でのアイヌ食文化への発信拡大など「アイヌ文化への共有・共感」への多様な表現に挑戦しており、アイヌ文化を未来へと繋ぐ空間として注目されます。



博物館での、アイヌ伝統の着物の展示。白老および噴火湾地方ではルウンベ(木綿衣)が着用されるのが特徴



サケの乾干し「サツチェブ」は、チセの囲炉裏の煙で燻す伝統的な製法で仕上げる



舞踊用3カ所、儀式用1カ所、手工芸工房1カ所の、5つのチセが並ぶ

●白老郡白老町若草町2丁目3-4
☎0144-82-3914
開館時間 8:45~17:00
休館日 年末年始(12/29~1/5)
入場料 大人800円、高校生600円、中学生500円、小学生350円
www.ainu-museum.or.jp

代表的な舞踊
「サロルンチカプリムセ(鶴の舞)」など、
公演は1日8回、毎時15分に開催

表紙作家の紹介



eclips

大泉 力也 版画家
Rikiya Oizumi

1987年 北海道富良野市生まれ

[個展]

- 2010年 「その揺れる花、それまでの風景」
(TO OV cafe / 札幌)
- 2011年 「幻視点」(ギャラリー犬養 / 札幌)
- 2012年 「幻は記憶の外にあって、手が触れない」
(cafe Esquisse / 札幌)
- 2013年 「たとえば、そこにいる私が夢で」
(ギャラリー創 / 札幌)
- 2014年 「fabulous wall october 大泉力也」
(fabulous / 札幌)
- 2015年 「白日夢」(kiitos / 札幌)
「夢い風景には、解釈を必要としない」
(ギャラリー創 / 札幌)

[グループ展等]

- 2010年 「第4回大学版画展受賞者展」
(文房堂ギャラリー / 東京)
「sense vol.5」(oyoyo / 札幌)
「版画の断面-2」
(東北芸術工科大学内ギャラリー / 山形)
- 2011年 「ソウゾウナイト」(a-life / 札幌)
「第50回記念道都大学中島ゼミ展」
(札幌市民ギャラリー / 札幌)
「茶廊法邑開廊7周年記念展覧会」
(茶廊法邑 / 札幌)
- 2012年 「ソウゾウナイト第2夜」(opera / 札幌)
「ArtWarm10周年記念展 WONDER WONDER」
(ArtWarm / 石狩)

- 2013年 「自分のためにアートを買いたい -U50,000- 2013」
(CAI02 / 札幌)
「第1回有限会社ナカジブリッツ」
(ギャラリー犬養 / 札幌)
- 2014年 「北の脈 -North Line-」(500m美術館 / 札幌)
「アートシーン美深2014」
(美深町文化会館COM100ギャラリー / 美深)
「art fair sapporo」(cross hotel Sapporo / 札幌)
- 2015年 「幻視点」(frequence / 札幌)
「そこからの風景」(DROLL / 札幌)
「幻視点、相律の風景」(花宮、hanare / 札幌)
「幻視点」(DROLL / 札幌)
「北の構図アート展」
(ヒアラタアートスタジオ、ギャラリー犬養 / 苫小牧、札幌)
- 2016年 「さっぽろ雪像彫刻展」
(本郷新記念札幌彫刻美術館本館前庭 / 札幌)
「幻視点」(Doubel Tall Café / 札幌)

[受賞歴]

- 2009年 第34回 大学版画展 美術館収蔵賞
- 2012年 第11回 南島原市セミナーヨ版画展
JA島原雲仙組合長賞
- 2015年 第90回 道展版画部 佳作賞
第5回NBCシルクスクリン国際版画ビエンナーレ展
優秀賞
- 2016年 当別町教育功績表彰 芸術文化功績賞

©北海道文化財団アトスペース企画展 vol.29

大泉力也個展「夢の行方は、明けの空も知らず」
会期：平成28年3月23日(水)～6月24日(金) 9:00～17:00
休館日：土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。
会場：北海道文化財団アトスペース
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)
入場料：無料



同じ話をする



lucid dream



フット・エッセイ | ⑫
文/写真 前田 司郎 Shiro Maeda

氷を歩く人

「ああ0度か。今日は暖かいな」
明治安田生命ビルの巨大な温度計
を見ながら、そう呟いて、俺もな
かなか北海道人に近づいてきたな
と、少し心の中でニヤッとした。
東京で聞く0度とは重みが違う。
札幌の0度はどこか軽やかだ。僕
は、澄川にある天神山スタジオに
ひと月近く滞在しつつ芝居を作っ
ている。稽古は夕方からなので昼
の間は書き仕事をするのだが、天
神山は静か過ぎてなんだか落ち着
かないので、電車に乗って街に出
る。雑居ビルの中にある喫茶店に
通っている。一番近い出口は34番
で、出口からは2分とかならない
距離にそのビルはある。大通りか
ら一本入ると雪が融けて氷の上を
歩かねばならない。慎重に歩く僕
をすいすい追い越していくのは皆
地元の人だろう。僕を追い越して
いく人の中には、自分の母親くら
いの年代の女性も居る。雪が融け
て氷になって、氷の表面が少し融
けて、摩擦のほとんどない地面を

どうしてそんなに速く歩けるの
か。長年の経験から何か特殊な重
心の移動法を学ぶのかもしれない。
僕は喫茶店でお冷を飲みなが
ら、口の中に含んだ氷を舌で弄び、
そんなことを考えた。氷を歯で砕
く。窓の外を雪がちらつき始めた。
まだ陽が残る、青空に雪が舞って
いる。この雪はどこから来るのだ
ろうか。雲もないのに。じーっと
見て居るのは僕だけで、やっぱり
まだまだ北海道人には遠いと思
うのだった。



前田 司郎 (まえだしろう)
劇作家・演出家・俳優・小説家・
劇団「五反田団」主宰

1977年東京生まれ。1997年、劇
団「五反田団」を旗揚げ。2004年
「家が遠い」で京都芸術センター
舞台芸術賞を受賞。2005年『愛で
もない青春でもない旅立たない』で小説家デビュー。2007
年、小説『グレート生活アドベンチャー』が芥川賞候補となる。
2008年、戯曲『生きてるものはいないのか』で岸田國士
戯曲賞を受賞。2009年、小説『夏の水の半魚人』で三島由
紀夫賞受賞。近年はテレビ・映画のシナリオや演出も手掛
け、2015年、『徒歩7分』で向田邦子賞受賞。近著に『私たち
は塩を減らそう』(キノブックス)、『口から入って尻から出る
ならば、口から出る言葉は』(晶文社)他多数。

人づくり一本木基金（長原實・スチウレ・エング 人づくり基金）

●人づくり一本木基金 ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野において、道内に在住又は道内を拠点として活動を行い、その向上発展に関し功績があった方々に「ものづくり一本木選奨」を贈呈しました。



○ものづくり一本木選奨 長原賞

中村 昇 (家具デザイナー、Furniture Design Nacka主宰)

日本を代表する家具デザイナーの草分けとして、北海道に根ざした家具デザインの魅力を国内外に発信し続けるとともに、家具産業の発展、向上に貢献。



○ものづくり一本木選奨 奨励賞

大谷 周平 (家具職人、(株)プレステージジャパン)

- ・平成25年第51回技能五輪全国大会家具部門銀賞。
- ・平成26年第52回技能五輪全国大会家具部門金賞。
- ・平成26年度旭川市新人奨励賞受賞。
- ・平成27年第43回技能五輪国際大会家具部門出場19位。

中山 千明 (建具職人、(株)カンディハウス)

- ・平成26年第52回技能五輪全国大会建具部門銀賞。
- ・平成27年第43回技能五輪国際大会建具部門出場16位、敢闘賞受賞。

○ものづくり一本木選奨 特別賞

松崎 孝一 (染織家、札幌手織松崎工房主宰)

札幌を代表する染織、ホームスピンの技術継承と普及、さらには後進の育成に貢献。

林 香 (家具職人、(株)カンディハウス)

- ・平成23年第49回技能五輪全国大会家具部門銅賞。
- ・平成24年第50回技能五輪全国大会家具部門金賞。
- ・平成25年第42回技能五輪国際大会家具部門出場21位。

【長原 實・スチウレ・エング 人づくり基金（愛称：人づくり一本木基金）】

平成27年10月に逝去された、株式会社カンディハウスの創業者である長原實氏並びにスウェーデン在住の家具デザイナー、スチウレ・エング氏からのご寄附をもとに創設した基金です。

工芸美術及びものづくり等の分野における、次代を担う人材の育成と創造活動の振興発展のため、平成27年度より次の4つの事業を行っています。

- ・奨学援助事業
- ・海外研修支援事業
- ・顕彰事業
- ・セミナー等の開催

「人づくり一本木基金」の詳細については、当財団ホームページ (<http://haf.jp>) 又は「北のどびら」106号をご覧ください。

アートシァター鑑賞事業

●平成29年度公演企画募集

平成29年度内(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)に道内3市町村以上で上演が可能な音楽、演劇、舞踊、伝統芸能等の舞台芸術の公演企画を募集します。

応募企画の中から、当財団が平成29年度に助成して実施する公演企画を選定します。

※ワークショップ、アウトリーチの企画も応募可能です。
※対象とならない分野：演歌、キャラクターショー、マジックショー、サイエンスショー、中国雑伎など

【応募条件】

平成29年度内に道内3市町村以上で上演可能な音楽、演劇、舞踊、伝統芸能等の舞台芸術の企画とします。なお、公演企画の応募は道内アーティストプログラムと道外アーティストプログラムに区分します。

▷道内アーティストプログラム

道内で活動するアーティストによる舞台芸術の公演企画です。
1公演企画団体につき4企画まで応募可能です。

▷道外アーティストプログラム

道外で活動するアーティストによる舞台芸術の公演企画です。
1公演企画団体につき2企画まで応募可能です。

【スケジュール】

時期	内容
平成28年3月上旬～5月9日(月)	平成29年度公演企画募集
平成28年7月7日(木) 音楽分野	「北海道舞台芸術情報フェア2016」の開催 【会場】 札幌市教育文化会館 公演企画応募団体は、道内の文化ホール等の担当者に対し公演企画の説明が可能です。
7月8日(金)	公演企画応募団体は、道内の文化ホール等の担当者に対し公演企画の説明が可能です。
平成28年10月下旬(予定)	「上演予定リスト」の選定 道内市町村や文化ホール等への意向調査結果等を参考に、当財団が平成29年度に助成して実施する公演企画を選定します。
平成28年12月～平成29年1月末(予定)	公演企画実施団体の募集 当財団が平成29年度に助成する公演企画等の実施を希望する団体を募ります。
平成29年4月～平成30年3月	公演の実施

○募集要項・応募方法：

詳細は、当財団ホームページ (<http://haf.jp>) でご案内しています。

○応募期限：平成28年5月9日(月)

○問い合わせ：(公財) 北海道文化財団

☎011-272-0501 (月～金(祝日を除く) 9:00～17:30)